

論文の内容の要旨

本論文の主題であるジュバ・アラビア語 (Juba Arabic) は、南スーダンを中心に話される地域共通語であり、その発生過程・文法構造・社会言語学的状況に鑑みて、「アラビア語クレオール」に分類される。ジュバ・アラビア語の語彙供給言語はアラビア語スーダン方言 (Sudanese Colloquial Arabic) であり、ジュバ・アラビア語と 20 世紀初頭までに分岐したアラビア語クレオールとして、ケニア・ウガンダで話されるヌビ語 (Nubi) がある。

本論文は、ジュバ・アラビア語の全般に亘る文法記述を試み、就中これまで十分正確なデータが提示されてこなかった、この言語における音素としてのトーンのあり方を明らかにすることを目的としている。また、この目的のため、適宜、アラビア語スーダン方言やヌビ語等との比較を行っている。本論文は以下に述べる全 5 章と、付録としての談話資料（語りの談話 1 話および方法説明の談話 1 話）、および参考文献からなる。

第 1 章 導入

第 1 節では、ジュバ・アラビア語、およびジュバ・アラビア語を含む同系のアラビア語ピジン・クレオールに関する先行研究について述べる。1970 年代後半～1980 年代前半に開始された初期のジュバ・アラビア語研究では、ジュバ・アラビア語を「自律的な言語体系」とは見なさず、旧スーダン周縁部における「アラビア語化のダイナミクス」の中に位置づける社会言語学的研究が重要な位置を占めていた。しかし、こうした言語学的分析視点は、1980 年代後半以後の記述言語学的研究の試みの中で見直されつつある。また、本節では、ジュバ・アラビア語の姉妹言語であるヌビ語や、同系であるとされるチャド南西部で話されるアラビア語ピジンについての先行研究を概観する。

第 2 節では、ジュバ・アラビア語の社会言語学的状況について記述する。南スーダンは 50 以上の民族語、公用語の英語に加え、ジュバ・アラビア語を含む種々の地域共通語が話される、複合的な多言語社会である。ただし、ジュバ・アラビア語は、単純に超民族的な共通語としてのみではなく、都市では第一言語として習得される主流言語であり、「南スーダン・アイデンティティ」の象徴としての社会的地位も併せ持つ。また、本節ではジュバ・アラビア語の種々の変種についても概観する。

第 3 節では、まず 19 世紀中期～20 世紀初頭の南スーダン地域へのアラビア語の導入とそのピジン化／クレオール化、およびヌビ語との分岐に関する社会・歴史的背景を概観する。次に、ジュバ・アラビア語の語彙や文法構造のもととなった諸言語（語彙供給言語、基層言語、傍層言語）について整理する。

第 4 節では、本論文の目的について略述し、本論文の基礎となる、筆者が 2010–2015 年に南スーダン・オーストラリア・ケニア・ウガンダで行ったジュバ・アラビア語とヌ

ビ語のフィールドワーク、および 2013–2016 年にケニア・ウガンダ・英国・イタリア・オーストリアで行った文献調査について述べる。

第 2 章 音韻論

第 1 節では、子音体系について記述する。ジュバ・アラビア語は地域共通語であることから、多様な話者をもっており、特に子音体系は話者の背景ごとに大きく異なる。これに加えて、自由変異が豊富に見られる。ジュバ・アラビア語では、多くのアラビア語変種に見られる軟口蓋摩擦音・咽頭摩擦音・咽頭化音・重子音等は存在しないが、多くのアラビア語には見られない軟硬口蓋鼻音、入破音、唇軟口蓋破裂音などの子音が見られる。

第 2 節では、母音体系について記述する。ジュバ・アラビア語（基層話体）は基本的には /i, e, a, o, u/ からなる 5 母音体系であり、それらの長短は弁別的ではない。ただし、種々の音韻的環境によってより低母音が高母音、非円唇母音が円唇母音と交替する型の自由変異が広くみられる。本論文では二重母音を音素として認めず、音声的な二重母音はトーンの振る舞いに鑑みて、単母音＋半母音あるいは母音連続として分析している。

第 3 節では、音節構造について記述する。ジュバ・アラビア語の最も基本的な音節構造は (C)V(C) である。子音連続などを含む複雑な音節も許容されるが、そうした音節構造は、母音挿入などにより回避され、結果的に上記のような単純な構造の音節へと収斂する傾向がある。また、母音初頭の音節は、直前の音節末子音あるいは母音と融合し、再音節化する傾向がある。

第 4 節では、プロソディ（トーン）の振る舞いについて記述する。トーンを担う単位は音節であり、語彙音韻論レベルでは高・低（あるいは未指定）の声調素が認められる。主としてアラビア語スーダン方言起源の大部分の語彙は、一語につき一音節のみが高声調を持つが、土着のアフリカ諸語起源の少数の語彙は、この規則に当てはまらない。本節では、後語彙レベルでのトーンの付与（イントネーション）、主として節・文末の境界トーンについても記述する。

第 3 章 名詞類

第 1 節では、名詞の形態統語論的特徴について記述する。名詞は、接辞付加・重複・複合などによって形成することができる。ジュバ・アラビア語の文法数カテゴリーは基本的に単数・複数であり、複数形はある種の補充法や接辞付加によって形成される。また、本節ではジュバ・アラビア語起源の固有名詞、およびジュバ・アラビア語における固有名詞の形態論的振る舞いについても記述する。

第 2 節では、限定詞（指示詞・数量詞・不定限定詞・限定形容詞など）および数詞について記述する。数詞は主要部名詞の前後いずれにも表れることができるが、多くの限定詞はそのいずれかに表れが限定されている。ジュバ・アラビア語（基層話体）には、

多くのアラビア語変種に認められる定冠詞が存在しないが、限定性は部分的に指示詞によって標示される。

第3節では、形容詞の形態統語論的特徴について記述する。ジュバ・アラビア語では、形容詞は一定の形態音韻論的振る舞いや形式から、独立した語類として認められる。ただし、その振る舞いや形式（例えば複数形形成など）には、人間名詞と共通する部分が多い。本節では、形容詞からの名詞派生、および名詞・形容詞の重複による形容詞派生についても記述する。

第4節では、種々の前置詞類について記述する。前置詞は、単一の形態素からなる単純な前置詞と、位置関係を表す場所名詞等を用いる複雑な（名詞複合を伴う）前置詞に大別される。本節では、これに加え、ある種の前置詞を用いた比較対象を表す構文、および呼格前置詞についても記述する。

第5節では、指示詞・再述代名詞以外の種々の代名詞類について記述する。人称代名詞は無標の形式である独立代名詞と形態素 *(bi)ta-* を含む属格代名詞に二別される。人称代名詞は照応や形式主語としての機能も併せ持つ。これらに加え、ジュバ・アラビア語では再帰・相互代名詞、不定代名詞などを認めることができる。

第4章 動詞類と単純な文構造

第1節では、動詞形態論について記述する。動詞の多くは語頭音節に卓立的な高声調を持ち、語末母音 *-u* を持つ、などの形態論的特徴をもつ。多くのアラビア語変種とは異なり、ジュバ・アラビア語はテンス・アスペクト・モダリティ (TAM) や主語人称による動詞活用は見られない。また、動詞に関しては、主としてトーンの振る舞いによって標示される、名詞・形容詞からの動詞派生、動詞からの動名詞派生、他動詞句の名詞句化のほか、動詞重複や同族動名詞を用いた動詞焦点化構文等の、複雑な形態統語論的振る舞いが観察される。

第2節では、動詞項構造とその交替について記述する。ジュバ・アラビア語の受動構文は、基底的な目的語は必ずしも主語に格上げされない、自動詞も受動化されうる（解釈は基本的に不定複数人称）、共格／具格前置詞 *ma/be* により行為者が標示されうる、などの統語論的特徴を持つ。また、形態上は標示されない自動詞－他動詞（および自発他動詞－使役他動詞）その他の項構造の交替も見られる。

第3節では、動詞を持たない述語を持つ文、すなわちコピュラ文・存在文・所有文について記述する。ジュバ・アラビア語では、（現実法に関する限り）コピュラは $\emptyset$ で示されるが、措定文などのコピュラとして、焦点小辞 *yaú* が用いられる。また、存在文は一項述語は存在詞 *fi* 「ある」などで標示されるが、主語は存在詞の前後いずれにも実現することができる。所有文は存在詞 *fi* あるいは所有詞 *indu* 等によって示される。

第4節では、TAM 体系について記述する。ジュバ・アラビア語では、多くの動詞の語彙的アスペクトは完了である。TAM 標識としては、動詞の直前にのみ現れる *bi*（非

現実) および *gí* (未完了) が、完了を表す $\emptyset$ と並んで最も基本的なものであり、これに加えて主語の前後に現れうる *kedé* (接続法) がある。この他に、過去・状態変化・完了・習慣・蓋然性・当為などを表す副詞が見られる。これに加え、少数の動詞や疑似動詞 (コピュラ・存在詞・所有詞など) は、語彙的アスペクトが未完了であり、TAM 標識 *gí* を付加できない。

第5節では、副詞について記述する。多くの副詞は名詞や形容詞から転成、あるいは重複により派生しており、副詞としてしか機能しないものは擬音語・擬態語や焦点化副詞・代副詞などの機能語に限られる。多くの副詞は動詞句 (あるいは形容詞句) の就職に関わるが、一部の副詞 (や副詞句) は文全体を修飾する。

第5章 複雑な文構造

第1節では、肯定叙述文以外の文、すなわち否定文・疑問文・当為文や (文末) 小辞をもつ文、および文としての機能を持つ語や句、すなわち間投詞について記述する。なお、疑問語の文頭への移動は、義務的規則としては存在しない。また、文末小辞は多くのアラビア語変種には見られない文法構造であり、基層言語からの文法借用の例である。

第2節では、関係節・焦点化構文・主題化構文など、文中の名詞句の (文左方への) 移動に関わる文法構造について記述する。移動される名詞句が基底的に目的語である場合を除けば、痕跡は再述代名詞 (外延は照応代名詞と同じ) で標示される。ジュバ・アラビア語には、焦点化される名詞に *yaú* という提示副詞から文法化した小辞を後置することによって示される対照焦点構文、*fí* という存在詞から文法化した小辞を前置によって示される情報焦点構文が観察される。

第3節では、種々の補文構造について記述する。補文標識には、言説・思考・間接的知覚などを表す *galí*、直接的知覚を表す $\emptyset$ 、視覚的類似を表す *zegalí*、間接疑問文を表す *kan*、評価対象・目的・などを表す *ašan* などがある。加えて、本節では使役構文や助動詞構文についても記述する。

第4節では、時間節、結果節、付帯状況節、仮定・譲歩節、理由・目的節などの副詞節について記述する。これらの副詞節は基本的に節頭の従属接続詞によって表示される。多くの副詞節では、TAM 標示の機能が中和するという特徴が見られる。

第5節では、等位接続や文と文の接続に関する談話標識について記述する。ジュバ・アラビア語では、等位接続詞や接続副詞によって節や文が接続されることがある一方、こうした要素を伴わない単純な並置も頻繁に見られる。加えて、直前の文を並列節や従属節として反復させること、あるいは移動動詞を含む節の直後の並列節で、同じ移動動詞を反復させることにより、節の連鎖性を表す特徴的な構文も見られる。